

### 研究のはじまりとその土台作りのために

杉本 浄

私はこれまで、インド東部のベンガル湾に面したオリッサ（現、オディッシュ）州を中心とする歴史研究に従事してきた。オリッサ州はほぼ日本の東北から中部地方を合わせた大きさがあり、現在四二〇〇万人以上の人々が暮らしている。博士課程から現在まで、オリッサ州に関する一連の研究を続けていくなかで、アジ研図書館を何度か集中的に使わせてもらってきた。

はじまりは博士論文の方向性が決まった時点に遡る。現在までそうであるのだが、新しい研究テーマが決まると、まず訪れるのがアジ研図書館で、もはや研究の土台作りに欠かせない場所になっている。

博士論文では、イギリス植民地支配下にあったオリッサで起こった、言語を核とした州統合運動に焦点を当てた。一九世紀後半から都市中間層を中心に言語擁護運動が起り、州創設運動へと発展していくなかで、地域アイデンティティがいかに形成されていったのかを様々な角度から検討することにした。オリヤ（オディア）語圏が複数の行政州にまたがって統治されていたこともあって、手始めに各州別の国勢調査、議会文書、州の年次報告に加え、植民地政府による憲政改革の報告書が必要になった。まだ、市ヶ谷にあった頃であるが、アジ研図書館でその重要な部分の多くを収集した。特に、一九三〇年から順次出された『サイモン委員会報告』の一四巻に収められた、州設置のための各

団体からの覚書を集めた部分は、研究をはじめににあたっ大変参考になった。

アジ研での文献調査を足掛かりに、オリッサ州立文書館や英国図書館など外国での文献収集を行った。そうこうしているうちに、一九九九年にアジ研が幕張に移ってしまい、それまで自宅から一時間内で行けた距離が、二時間以上になった。しかし、遠くなった代りに、開架式の広いスペースで、パソコンを持ち込みながら効率的に仕事ができるようになり、開館から閉館までの時間を館内で過ごすようになった。

新図書館では、博士論文の準備と並行して行っていた二つの研究テーマを調べに訪れた。ひとつはオリッサの代表的な書記カーストに属した二人の女性が、インド独立運動に関わりはじめた要因を家庭環境とともに探るものだった。この時、女性史に関する二次文献や国勢調査の統計をアジ研図書館で使わせてもらった。

二つ目は、史料も過少ななぞの放火事件に関する研究である。一九二二年にオリッサの中心都市カタックで連続放火事件が起こった。うわさされた複数の犯人像を分析しつつ、当時の町の社会状況や社会関係を明らかにしようとした。アジ研図書館では、カルカッタ（現、コルカタ）で発行されていた英字新聞『ステーツマン』を読み込み、事件に関する記事というよりは、記事全体（広告も含め）から、この時代の雰囲気をつえようとした。

二〇〇五年に博士論文を提出してからは、図書館を訪れる頻度が格段に落ちた。それでも、近年新しくはじめた鉱山史の史資料集めに出かけている。オリッサの丘陵部は鉄鉱石、石炭、石灰、マンガン、ボーキサイトなどの天然資源が豊富である。トライブと総称される少数民族が多く住むこの地域で、鉱山開発がどのように進展してきたのかを、植民地時代から現在までを対象に研究している。これまで鉱山関連の資料や県別の地誌、国勢調査などを使用させてもらっているが、まだまだ未見のものが多い。

ところで、二〇一七年はインドが独立してから七〇年になる。現代史が長くなるにつれ、自分の研究対象も近代から現代史に移りつつある。オリッサ州の研究仲間からも現代史を積極的にやろうという誘いを受けている。すでに彼らは現地語新聞から重要記事をまとめ、年譜として整理していく作業をはじめている。今後は、アジ研図書館の各英字新聞からオリッサに関する記事を集め、同地への外からのまなざしを比較研究出来るような基礎作業も行っていきたい。

実は、はじめて図書館を利用したのは自分の研究ではなく、アジ研の所員である近藤則夫さんのところでアルバイトをするためだった。研究所が市ヶ谷にあった時代のこと、その作業はマイクロフィルムに写されたインドの各英字新聞から、一九八〇年代の重要な出来事を抜き出して、年譜にまとめていくものだった。この経験が存分に活かされる機会が巡ってきた。図書館を「使い倒す」気概を持って通い続けたい。（すぎもと きよし／東海大学文学部アジア文明学科専任講師）